

たるは争ふ可らず、誰かブルードンの『財産とは何ぞや』を以て、不朽の大作に非ずといふや、誰かバクーニンの『神と国家』を以て、千古の雄篇に非ずといふや、誰かクロボトキンの『相互扶助』を以て、近時の生物学上、社会学上に於ける大発見、一大著述に非ずといふや、筆は剣よりも強し、何者の威力、権力、金力も、決して是等の大思想を鎮圧絶滅することを得ず。

幸徳秋水

彼は平和と自由の絶対的条件として、ヨオロッパ諸国の連合を主張した。即ちヨオロッパ合衆国の建設を唱えた。その組織こそ、自由連合主義に依る、未来社会の組織を教示した最初のものである。

久保 譲

ヘーゲルをもふくめて多くの哲学者が世界の解釈に浮身をやつしていた当時、必要なのは世界の解釈ではなくて世界の変革であることを自覚し、一切の形而上学からの離脱を宣言し、もっぱら実存的行動者として、無類の雄弁家として、パリケードの不敵な戦士として、わがミシェル・バクーニンは何時も西ヨーロッパに起きたあらゆる革命闘争の第一戦にいた。しかも、かかる行動型の

人物にありがちな粗雑さなどは彼にはみじんもなかった。彼は実に細かい神経の持主であった。ドレスデン一揆の前、当時、眼を病んでいた音楽家ワグナーとの最初の出会いの時バクーニンは彼の眼にランプの直射光が当たらないように、長い対話のあいだ中、それとなくその巨大な手で光線をさえぎり続けていたと言われている。

小川正夫

監獄に来てはじめてのその夢よ 吹雪に立てるバクーニンの顔 (短歌)

後藤謙太郎

バクーニン全集刊行の事は、凡ゆる意味に於て『必然』の二字に尽きます。古来大衆は色々な自覚をし、又革命をして来たが、最後の一つ『政治』に対する偶像視から丈は免れてゐない。この際偶像破壊の第一人者としてのバクーニンの思想に接することは、大衆をして真の最後の自覚に到達せしむる事である。我々は此処に彼を迎へ、それよりして更に我々の新しき道を開拓して進まなければならぬ。

高群逸枝

かれの真摯にして不屈、且つ思慮深き性格は、

かのジュラの山地のバクウニンが友を忍ばしめたり。

かれは烈しき熱に冒されて病の床に横たはりつつ、なほよく死にいたるまで謔言を口にせざりき。

石川 啄木

封建主義的残存物の多い日本に於ては、バクーニンの著作は大いなる啓蒙と刺激を与へるでせう。

秋田雨雀

バクーニンはやつぱり、私にはいつまでも懐しい小唄詩人である。

岡本 潤

バクーニンは……嘗て西欧に於ける革命運動に没頭したばかりで無く、常に故国露西亜の革命に尽力する事を怠らなかつた。

速藤友四郎

バクーニンの様な強い個性の行動は兎に角破壊的だから、幼稚な頭には悪い印象を与へるのを自分は恐れる。然し彼位の破壊思想を消化出来なくては仕方がない。

煙山専太郎

バクーニンは無政府主義の講談家ではない。切に之を實現しようと力めた運動家である。……バクーニンは己れの主張する所が何等の臭味なく、何等の汚染もなく国民的の色なきに誇りて、以て己れの主義を無色無形主義と號したのである。

久津見 藤村

バクーニンがベルンの大会において、共產主義を罵つて、共產主義とは社会のあらゆる勢力を国家の手に集中するものであると論じたことは極めて傾聴に価するところである。

室伏高信

空想的無政府主義の方法がその無能を暴露した後、無政府主義を労働大衆の階級闘争と結び、強力的な社会革命を以てその主要なる戦術となしたものは主としてバクウニンである。

森戸辰男

主に戦前の邦訳文献からいくつか採録した。選択と配列には基準はなく任意である。

「ミッシェル」の名は彼等の会話の中でよく回想されたが、それは席を外している首領の、意見だけが金科玉条というのではなくて、誰もが敬愛をもち、友愛の精神で個人的な友人のことを語るような具合だった。私がつとも感動したのは、バクーニンの影響は知的権威としてより、道徳的人格の影響と思われたことだった。アナキズムや連合のあり方などについての話合で、問題を解決するのに、「バクーニンならこう言う」とか「バクーニンはそう考える」とか聞いた試しがない。彼の書きものや言葉は、政治結社の中では不幸なことによくあるような憲法とはみられていなかった。知性が最終判断を下すべき問題では、みなが討議の中で自分なりの議論をしていた。あの人達の大体の傾向や趣旨は、バクーニンの示唆を受けていた、またバクーニンがジュラの友人達から借りたものだつたかもしれない。が兎角、各人は論議において個性的だった。一度だけバクーニンの名が一

彼の理念は新鮮で、永遠に生きつづけよう。

マックス・ネットラウ

バクーニンの生涯は、……真に暴風の生涯であつた。権力に対するあらゆる種類の反抗が、常に彼の同情を惹き、之を援護するに当って、毫末も一身の危害を意としなかった。確かに偉大だった彼の勢力は、重要な人々に対する其人格の影響から主として生まれている。

バートランド・ラッセル

私はトルストイの支持者であるばかりでなく、彼れの言う意味において私は無政府主義者である。……同時に私はバクーニンの支持者であつて、彼れの思想の少部分でなく、大部分に賛成する。同様にまた私はクロボトキンの支持者でもある。クロボトキンはトルストイとともに私の思想に非常に多くの影響を与えてくれた人である。事実、私の思想はこの三人の思想的綜合を表わしている。そして……新時代の知識を豊富にするために、あらゆる無政府主義思想の統一——一種の協力——を創造したいと企てている。

ビエール・ラムス

個の権威そのものとして、喚起されるのを聞いたのが印象深く、今でもその会話のあつた場所とふん困気を覚えている。幾人かの若い人達が女性について、余り甘しくない話に熱中していた際、そこに居合わせた女性のひとりが「ここにミッシェルさんがいないのは残念ね。あの人ならあなた方を思い知らせて呉れたでしょ。」と言つて話の腰を折つてしまつたのだ。革命のためにすべてを抛ち、そのためにだけ生きた人としての偉大な革命家の姿、革命についての彼の考えから借りて来た最高の至純な生の視点等がある人達を激励しつづけているのだつた。

ビョートル・クロボトキン

バクーニンは人間らしく在ろうとする豊富さに対し、八法律Vでもつて対応するすべてのものの廃止を要求する。バクーニンは新しいもの、成ろうとするもの、来るべきものと共に在り、過去、現在、伝統的なものとは対峙する。彼は死に行くものに背を向け、混沌の多産性と共にいるのだ。バクーニンはプロメテウスの気質がある。彼と並ぶとクロボトキンはジョルジュ・サンドのようだし、マルクスは赤い警察官、ゲーベウの長官みたいなものだ。

フリッツ・ブルーバッハー

バクーニンは祖国ロシアを去り爾來革命を画策しつつ欧羅巴各地に奔走した。……彼はシベリアより脱走して一八六一年日本を通過しカリフォルニアを経てロンドンに亡命した。茲に至つて彼は再び直ちに革命画策のために日夜の奮闘を開始し心身を其為に捧げつつ欧羅巴の各地に転々奔走した。

パウル・エルツバッハー

私たちは、近代革命の真の予言者であると自認することが出来るのはマルクスよりバクーニンである、とみる事ができるのだ。二十世紀の最も重要な三つの革命——ロシア、スペイン、中国における——はすべて相対的に遅れた諸国で起り、バクーニンが予見したように、たいがい都市貧民の自然発生的な暴動と結びついた「農民戦争」であつた。

ポール・アヴリツチ

使用物の分配に関しては、共産的無政府主義は、自ら社会主義と同じような異説に分れてをる。この説の最初の代表者殊にバクーニン及びモストは尚、無政府主義の社会では、原則として、各員の為した労働を標準として享樂手段を分配すべきである、従つて無政府主義の社会

に於ても全労働収益権が認められねばならぬ、という意見から出発してをる。

アントン・メンガー

社会主義にとつても亦必要な区別であるが、秩序の下に於ける隷属と服従との本来の区別を理解すれば、この規律が、縦令バクーニンの場合、何よりも先ず革命的闘争の規律のみに関するものと見えようとも、而も尚、彼がそれを以て、その強制行使が一の他に対する支配に基づかず、万人の連帯に基いて成されるような一の社会秩序一般の本質の有つ特色としようとしている事は疑いを容れない。

マックス・アドラー

バクーニンの「書簡往来」は、将に成立せんとする無政府主義の思想のよつて来たる所以に対して、深き洞察を吾人に与ふるものである……。「人、吾が頭を打つこと一度、再度、将た十度二十度なるも可なり、第二十一度に至つて、若し民衆我を授け、相率ゐて革命に与みせんか、吾人は犠牲に対して優に償はれん」とバクーニンは喝破して居る。

ルードヴィヒ・シュタイン

つてもそうであるように、彼にとつても革命は、ことばの聖なる意味において祭典である。……バクーニンは、彼の同時代人にとつては偶像であつた科学に対し、かなり例外的な深遠な思想をもつて戦いを宣した、彼の時代における唯一の人間だつた。

アルベール・カミュ

バクーニンは、所謂集産主義的無政府主義の代表者である。彼は私有財産即ち使用物の私有を固守するが、土地及資本の共有を主張するのである。即ち彼は所有権制度を改造して、消費資料には尚私有を許容するも、土地労働用具並に一切の資本及社会的財産には、ただ共有のみを許すべしと云ふのである。然るに此社会的改造は、マルクス主義とは反対に、中央集権的で無く、地方分権的に行うべしとする。……バクーニン主義者は、自ら反官憲的集産主義者と名乗っている。

カール・デール

グラノーフスキ「バクーニンは、寝言をいっぱいつめた古い腐った袋だ、あいつは子供を便所へ棄れることだつて朝飯前だよ」

大学生「あんたには朝飯前とはいくまいね」

ピョートル一世やコンヴァンションは七マイルずつ歩む靴で進むことを、また懷妊の一ヵ月目から九ヵ月まで一足とびに進むことをわれわれ（バクーニンと筆者）に教えた。また途上にあるすべてのものを見さかしく打ちくたたくことを教えた。破壊の情熱は創造の情熱である——そして不明の破壊者なる神につきしたがって前方に、打ちくたかれた宝につまづきながら——あらゆるごみやあくたとともに。

アレクサンドル・ゲルツェン

個人主義的理論は、必然的に政治的主権の否定と無政府主義とに還元されるか、又は反対に、個人的自由の否定と政治的絶対主義とに還元されるかである。——スチルナー及びバクーニンの無政府主義に還元されるか、又はルソー及びヘーゲルの絶対主義、更に進んではジャコバン又はケーザルの専制主義に還元されるかである。

レオン・デュギー

「破壊の情熱は、創造的情熱である」。四八年の革命に關するバクーニンの燃えるがごとき表現は、あの破壊の悦びを熱情的に絶叫する。「はじめも終りもない祭典」と彼は言う。じつさい、すべての抑圧された者たちにと

フョードル・ドストエフスキ

バクーニンも、或る時期の間、ロシアにおいては自由が「上方から」来るといふ当時の多くのインテリゲンツの希望を分け持つてゐた。一八六三年におけるアレクサンドル二世のポーランド膺懲は彼をこれらの幻想から数ひ出した。更に西ヨーロッパの労働者運動——主としてイタリー及びスイスにおける、——への参加は完全に彼を、彼がすでに一八四八年において立つてゐたところの革命の道に引き戻した。尤も彼は、如何なる幻想に捉はれてゐようとも、常に性格的に革命家であつた、バクーニンはラヴロフよりもより直接的な意味において民衆派であつた。彼にとつては民衆・国民大衆は革命の直接的な源泉であつた。民衆には如何なる批判的に思惟する個人も必要でない。「国民に教へるといふのか？」とバクーニンは問うた。それは非常に愚かなことであろう。民衆自身が我々よりもよく何が必要であるかを知つてゐるのだ。それどころか、我々は民衆のところでの生活と力との秘密を学び理解しなければならぬ——この秘密は成程むずかしいものではないが、しかし謂ゆる教養ある社会に生活している総てのものにとつては近づき得ざるものなのである。」

ミハイル・ポクロフスキ

2 バクーニンとルクリュ

三浦精一

バクーニンについてはあまり知らないと、いつも僕は思つて来たので、このバクーニン特集には何か訳して見ようかと思つていた。知らないというのは、あまり親しみを持たなかったということだが、一体誰を「よく知っているのか」と自問すると、「誰一人知つてはいないではないか」と自嘲せざるを得ない。僕を感動させ、僕にアナーキズムの最初の概念を形成させてくれたクロボトキン。僕に地理の勉強をしたいと念願させたルクリュ。

古代史の勉強をせよとすすめて手ほどきをしてくれた石川さん。この三人について僕は一体どれだけ知つていいのか。それなのに若い同志たちは、この僕という白髪の老頭児が、いかにも深く知つているように扱つてくれている。いわば僕はそうした通念の世界で生かされている人間でしかない。いつもこう思うと「はずかしさ」に責められて、先の短かい老体を鞭うつて、さらに学ばずにはいられないというのが現実だ。その現実の頭の悪さと生計のためにかせがねばならないという悪条件の上に立

つている。
若い同志にすすめられて、こうした罪の意識にも似た気持で、この一文にとりかかつている。主としてポール・ルクリュの「ルクリュ兄弟」により、石川さんの「エリゼ・ルクリュ」を参照している。ポールはエリゼの兄エリーの子で、エリゼに最後まで従つてその生活と思想を共にした。

ルクリュ兄弟（弟妹合わせると十一人）は、キリスト教を身をもつて実践しようと祈りつつ生きる信仰の厚いプロテスタントの牧師の家庭で育つた。ビレネーに近いオルテの町であつた。貧しさの中に純潔に生きる喜びを知る両親は、エリーやエリゼの未来に、神の国の伝導者を期待していた。この父は、ある夜自分の畑のジャガイモが盗まれたとき、自ら掘り起したジャガイモを畑の側の路傍においた。「盗み」を犯さずに持つて行つてくれるようにである。少年エリーとエリゼの心に形成された

ものは、彼等が後に無政府主義者となり、十九世紀の科学主義に染まつて無神論者となつた後にも、「構造」として彼等を支え通した基盤であつた。その上にアナーキズムが構成された。後にバリ・コミューンに武器をとつて参加したエリゼは、政府軍に捕えられ、一発の銃弾も発射していない理由を問われた。「私は人を殺すために銃をとつたのではない」が、その答えであつた。

一八六八年、兄のエリーがスペインに行つたとき、その持前の善良さから共和主義者と交流して誤解を招き、スペインのバクーニンの仲間を激昂させ、スペインでの国際友愛会の分裂といった重大事を起したことがあつた。このことでバクーニンは暗然としたかも知れないが、決して怒らなかつた。バクーニンは後で書いている。

「中でも私はルクリュ兄弟について書く。私の生涯に会つた人々の中で、この二人は学者であり、そして同時に最も純正な、もつとも崇高な、もつとも無私な、もつとも純な、その主義に対してもつとも宗教的に献身している人たちである。もしマジニが私同様彼等に会つたとしたら、彼は、まったくの無神論だと自分で言っている者が、かくも深く宗教的であり得るということを確信するにちがいない。これは彼らが何よりも義務をつくす人々だからである。そして彼等は最後までその義務

をはたした。……原則的には一致しながら、その原則の実現の問題では、非常にしばしば、ほとんどいつでも、われわれは分かれるのだつた。……」

意見の差をこえて、こうして続く彼等の友情、これが友愛（フラタニテ）である。バクーニンの中にもルクリュたちと同じ構造があつたことを思わずにはいられない。何かと言えば悪罵したり、ゲバつたりすることを率直だと考えるような軽薄さとは異質なものである。彼等の間ではアナーキスト社会のモラルが実践されていた。革命は今われわれの現存在自体の中からはじまる。バクーニンの魅力にはこうしたものがあつたに違いない。

一八三〇年に生まれたエリゼは、十三才のとき兄や姉が行つていたドイツのノイウイン（ライン河畔、コブレンツの近く）に一人で行つた。鉄道網もまだ発達せず、ほとんど徒歩が多かつたという。この地方に多かつたモラヴィア派（兄弟愛を実践するフスの系統のプロテスタント）の人々の間で、この子供たちを教育したいという両親の願いからであつた。しかし当時はナポレオン戦争以来の愛国的風潮の強い時代で、両親の期待とは裏腹に、その学校でエリゼたちが味つたことは、「彼の罪は彼がフランスのドルドーニュ生れだ」ということだつた。（ドルドーニュはオルテの東方、エリゼたちの祖父母が

住んでいた。)

やがて家に帰り、兄とともにモンターバン(ツールーズの北)の神学校に入った。エリゼはそれからストラスブールの大学で神学を学び、エリゼはストラスブールに兄を訪い、ノイウィーンを経てベルリンに行つて地理学を学んだ。自活しながらの苦しい勉強だった。学資がつかず盗聴もした。こうしてエリゼは師カール・リッターを事実において継承する者となった。しかし、アカデミックスにはリッターの継承者は、ラッツェル(ドイツ)、センブル(アメリカ)、ド・ブラーシユ(フランス)とされている。事実においてと言つたのは、リッターにおける形而上学的な目的論を克服して十九世紀の科学的な基礎の上に地理学を築き上げたのはエリゼであつた。エリゼの世界大地理は画期的な著述だった。フンボルトの自然地理学の流れを汲む者はルクリュがリッター同様に地理学と歴史学を分離させていないと言うだろう。こうした点はラッツェルやセンブルにおいても同じだが、人間の生活空間自体が歴史的空間であり、その歴史的空間の断面を歴史とは別に考えないで、歴史を時間的な地理と考えているのである。同じ地理学者としてのクロボトキンも方法的にはルクリュと異つたものを持つていたように思われるが、彼はシベリヤにおける彼の全調査を

提供してルクリュの著書を大成させ、また相互扶助論にはルクリュの方法をそのまま生かしているのである。

この二人の地理学が一つに交流したように、アナキストとしての二人の思想も深く交流している。バクーニンはブルードンと夜を徹して語り合ったが、ルクリュ兄弟はブルードンには会っていない。彼等は苦しんで学ぶ間にブルードンやゴッドウインを読んだ。エリゼの言葉とされている「秩序の最高の表現たるアナルシー」はブルードンからの引用である。

ルクリュとバクーニンの接触について書く前に石川さんがブルードン、バクーニン、ルクリュのアナーキズムの比較表をつくっているから、それを書いておこう。

ルクリュ	ブルードン	バクーニン	経済組織		手段
			私有(所持)	社会組織	
共産的	集産的	自由地域団体の連合	町・村・都市の連合	平和的・革命的	革命的
			経済的系列の自由連合	革命的	

この表をそのまま文字通りに暗記されないように望む。石川さんは三者の用語をそのまま便宜的に配列している。ルクリュ兄弟も人民銀行を設立したことがある。集産的

といつてもルクリュの共産的と別のものではない。ルクリュは個を基礎としての共産を考えている。虫も殺せないような心やさしいルクリュやクロボトキンが革命的(暴力)手段を是認した所に人間の頑冥さ、歴史や科学の非情の交錯の中での、ニヒルを見ねばなるまい。石川さんは無政府共産主義という考え方は、ルクリュからクロボトキンが受継いだものと言っている。

学業を終えてオルテに帰つたエリーとエリゼは、一八五一年ナポレオン三世のクーデターに抗してオルテの市庁舎を占拠しようとして失敗し、追われる身となった。亡命の苦しい生活はイギリスを振出しにアメリカ大陸での放浪と続き、帰つて来たのは一八五七年だった。

兄のいたバリに来て、地理学会の尽力でどうにか生活の見通しをもつてきそうなので、前から知っていた混血娘(仏×何)と結婚したのは一八五八年の暮だった。ハシエット社のために旅行書を作つたり、両世界評論に寄稿したり、地理学的著述をして、名実ともに地理学者の地位をかためた。兄のエリーは宗教民族的な著述によつて知られた。

ヘルツェンに会つたのはイギリス亡命中でアメリカではヨハン・モストに会つた。バクーニンは一八六四年十

一月六日、ヘルツェンの伝言をもらしてバリでエリーに会い十日まで滞在してエリゼにも会つた。

バクーニンが来たのは、彼がフィレンツェで創設した秘密結社にフランス人のメンバーを加えるためだった。

「バクーニンがエリゼを説き落して同意させたということはできない。本能的に同意見だったのだから。エリーの方はいくらか懐疑的だったが、エリゼとは同じ血、同じ情につながる。ためらわず同意した。こうして二人は国際友愛会(Fratinité internationale)のメンバーになった。……しかしエリゼは決してバクーニンの使徒とはならなかったし、人にそう言われることも不服だった。この時からバクーニンの死にいたるまで、バクーニンに対しては常に『君の独立の兄弟』と自称した」とポール・ルクリュは書いています。

翌年エリゼはフィレンツェでバクーニンに会い、イタリアの同志たちとも交流した。一八六八年のベルン大会でバクーニンとエリゼが、いかに密接に協力したかは人の知る通りである。

一八六九年二月にエリゼの妻が急死し、スペインに行つていたエリーも飛んで帰つて来た。残された子供たちの養育の問題もあり一八七〇年五月に再婚した。

翌年の一八七一年にはエリゼはバリ・コミュニケーションで捕

えられ投獄された。地理学会は釈放のために運動し、当局の条件を呑めば、という所までこぎつけたが、エリゼはどんな約束も条件も拒否して軍法会議で無期流刑となつた。全世界の知識人が立ち上つた。署名をつきつづけた政府は、やむなく十年の国外追放に減刑した。一八七二年二月からスイスでの亡命生活が始まつた。この時四十才であつた。

資料を調べにミラノの図書館に行つたときバクーニンが会いに来た。一八七二年四月二十九日付でエリー（当時チューリッヒにいた）に書いている。

「バクーニンとその友人が、まる一日いた。それで僕たちが語り合つたことのすべてを要約することはむづかしい。彼は非常に理性的だつた。バクーニン僕にとつては、なつかしい愛情に満ちた友人だつた」。

一八七三年九月二十六日付のジュネーブ新聞に引退表明を出して各地にセンセーションを巻き起こしたバクーニンは、一八七六年七月一日ベルリンで死んだ。駆けつけたエリゼは同志たちと共に埋葬をすませて墓前で演説をした。

エリゼがクロボトキンと会つたのは、その翌年の一八七七年で、クロボトキンはバクーニンとは会つていない。エリゼは二人のロシア人と深い友情に結ばれた。ロシア

革命が起つた後、故国へ急ぐクロボトキンはベルギーのブルッセルの近郊で臨終の床にあるルクリュに別れを告げに立寄つた。

友を送つてルクリュは、「革命だ！オー革命だ！」と叫びつつ息を引きとつたという。一九〇四年七月四日であつた。



3 バクーニン寸評

バクーニン百年祭を記念して、M氏から何か一文を書けよ、と言われる。

六年間、病院生活に生きている僕。それにバクーニンよりマラテスタの方により多く興味を感じている僕には難問。全集についての記憶も薄れている。『時代』という根本焦点も考慮に入れなければならぬ。

ロッキード事件。『プロレタリアート・ディクタツラ』の宮本日共のレーニン流解釈は、イタリヤ、フランス等で党綱領の中から削除しようという時代だ。

歴史は動いている。アナキズムもまた当然、原則論、――（それは『未解決』の組織論）から戦術、戦略を再検討して行かねばならぬのだ。

タイム・レコードを巻きかえし、通り一遍の年代記を書く人は他に多くおろう。

アナキズム復権のとき、若き人々に待望することあれ、老人は片隅に引き込む時代。

だが三浦氏との約束もあり、多少の雑感を書いてみる。

高石 新

他日、詳述する。『僕のA』で。

一九七六年四月二十日、日共の不破は、記者会見をし「プロレタリアート執権」の問題についての見解をまとめて発表した。よほど尻こそばかったのだ。ベテン師め。近く党綱領の中から『プロ執権』の用語を削除する前ふれ（理論的裏付け）。

その骨子は①「科学的共産主義」の創始者であるマルクス、エンゲルスは「プロ執権」を暴力的概念を示す用語としては使っていない②しかし、レーニン、スターリンの時代に議会政治を否定し、直接の強権行使を意味する用語として使われた③日本共産党はレーニン、スターリン流の解釈はとらないが、特別の注解を必要とする用語は誤解を招きやすく適当でない、と言っている。

共産主義の基本概念であるプロレタリアート・ディクタツラは長い間「プロレタリア独裁」との訳語が使われていたが、共産党は四十八年の党大会で綱領の中の訳語を『プロレタリアート執権』に直した。これは『独裁』

という字句が暴力革命ではなく、民主的な変革を通じて社会主義を実現するという同党の革命路線のイメージと合致しない。との判断からだったが、今年になってフランス共産党が高度に発達した資本主義国での『先進国革命』の立場から『プロレタリア・ディクタトゥーラ』の放棄を決定したことなどから、官本が日共も次の党大会で綱領から削除することを示唆。

不破書記長の論文は、マルクス、エンゲルス、レーニンなどの著作を引用しながら国際共産主義運動の流れの中で『プロレタリア』の用語の意味の変遷を説明し、この問題に対する共産党の立場の「正しさ？」と「理論的一貫性」を強調したものだ。

この中で不破はマルクス、エンゲルスとレーニンを明確に区別して①マルクス、エンゲルスは「プロレタリア」を「労働者階級の権力」と同義語、つまり、人口の多数者を代表する権力であり、その政治形態は普通選挙にもとづく議会を最高機関とする民主共和制を想定していたが、これは日共の社会主義への展望と矛盾したものでない、②これに反して、レーニン、スターリンは「プロレタリア」に必要以上にロシア革命の特殊性を反映した意味、つまり強力（暴力）革命の必要、議会政治の否定、直接の強権行使などの意味を付け加えたため、国際共産主義運動

当時マラテスタは「インタナショナル」は階級の別なく一切の革命家（筆書注、人民と訂正せよ）をその旗の下に糾合すべきである。また我々はサンジカリズム（労働組合主義）からイタリアが期待するものは何もない」と主張した。（一八七六年ネットラウ）

革命の方法論については、クロの「サンジカリズムとアナキズム」〔アヴリッチのロシアアナキズム全史の中でアナルコ・サンジカリズムに批判的と書いている〕

「少数者の創造的暴力」のかわりに「民衆の内在的組織論」民衆の意識的樹立」へ前進させるのが、Aの任務。アナルコ・サンなど延島の亡霊だ。自聯第二回継統大会で布留川信や綿引邦農夫君らが喝破している。

昭和三年三月十日発行の「自由聯合」第二十二号は京橋区木挽町二の一〇、梅本英三君の発行人署名だが、それに「関西自由聯合」の会報欄に「一月七日。組合運動と思想団体運動との関係について——平井君説明。」とあり「関西黒旗連盟、自聯、水平社解放聯盟等と仲良く新年茶話会を開催した事を記している。現に同号二面の内海紡績尾崎工場での二月十三日のストライキで暴力団の抜刀の中を工場長と猛交渉したのは単身、みんなを代表して乗り込んだのは、僕だ。ヌエ的なアナ・サンは否定する。観念的階級闘争説（八太舟三）は御免だ。」「自

のうえでも「ロシア革命型執権論」が使われるようになったが、これは正しい解釈ではない——との考えを示し、党綱領中の「プロレタリア」の削除を検討するとともに「マルクス・レーニン主義」という言葉を「科学的社会主義」という呼び方にするよう提唱。

選挙で勝ち社公民と統一戦線を達成したためのウソの方便、毛路線の文化革命はくりかえし『プロレタリア』の学習をウルサイ程、「人民週報」で連載しているが『階級闘争説』（八太の観念論はインチキ。）を採る以上『プロレタリア』は常識だ！

バクーニンは、民衆に革命を煽情し、「民衆的暴動が革命の戦術」であった。かれは最後に一八七四年、イタリアのボロニア蜂起に失敗して、それから二年目の一八七六年、晩年は孤独でベルン市で病死した。

クロボトキンは、一八七三年のナロードニキの時代、圧制者の暗殺を支持し、テロリズムを、束縛された民衆の使用しうる数少ない低抗手段と考え（ネットラウ、アヴリッチ）「行為による宣伝」を肯定し、且つ実践した。その後ロシアが反動期に入るや、クロボトキンは一八七七年、ケントで国際社会党大会に出席、社会民主主義を含むオール・ラテン諸国の労働者団体の自由連合を擁護した。

由聯合主義を以て労働者農民解放運動の基調とす、とあらためさせたのは僕等だ。

『大道貫古今』と岩佐佐太郎遺稿集刊行会が出ていて、天皇制アナキズムや組合山賊論などというものを岩佐老が広言していた時、僕等は地にもぐって、八木秋子がついて来た荷物を山岡英治、逸見三郎、田代儀三郎、大目方盛平らと僕のアジト——浜寺の傍の高石町新村から持ち出し飛田遊廊の近くの質屋を夜中、動き回ったのは僕。自由聯合組織についてバクーニンが「下から上へ」「円周から中心へ」は明らかに誤謬である。それは結成的組織を建築し、政治行動の組織体となり、自由ソビエト組織に外ならない。クロボトキンの網状組織は遂に分散的組織を要求してのみ始めてコンミュンの組織を実現し得るものと僕は思う。

宮崎晃君の「農村青年社」事件は八木秋子は昭和九年一月、出獄したが、当時の感想をくわしく僕に通信して来ている。僕は地底にもぐって居たのだ。鈴木靖之との反目。状勢を過大視し、長野のみに「時こそ来たれり」と急ぎすぎた欠点。状勢判断が甘すぎた農青事件の終わり。夏の日ば、もう過ぎたのだ。また相沢、二見らの「日本無政府共産党事件」

これも小林一信、柳沢善衛が現在、生きているから、

それらに聞けば善い。二見のヒロイズムと言ふか、人間の魅力（英雄主義！）に、きづかれたのだ。レーニンの「国家と革命論」（角川文庫）によろしく。

逸見、久保、大串の「労運社」参りも、共学社、石川三四郎の「ディナミック」も望月百合子が古川時雄と満州に飛び、鷹樹寿之介は反動へ去り、逸見、久保またエセ・アナキスト、日和見主義で近憲と界真柄の結婚で火の消えた今。龍大関係の東京、中部、大阪の若き諸君に期待を継ぐより外はない。

バクーニン、マラテスタの文献は「自由聯合」「黒色青年」の復刻版を見ればよく判る。

メーデーを明日に迎えて。黒旗の下、われらはこの旗を守る。亡くなった霊よ、永遠に生きよ。自由アナキスト万才。

病床より リベルテールの会へ



5 純粹理論のかなたに

1

いま、私たちが一〇〇年以上も前のバクーニンの著述を読むと、その社会批判は現代の社会状況を鋭く予見しているだけでなく、これからいつそうその正当性が確認されるであろう、ということに気づく。二、三その事例をあげよう。

日本のある大きなマルクス主義政党がディクタトゥーラの訳語を独裁から執権に変え、次いで削除したらしい。これらの一連の動きは外部のものからするとあまりよく理解できないのだが、商業新聞の報道によると、この党の委員長は、プロレタリアート執権削除について異論を言うのは「ちょっと勉強しはじめたような大学院生」に多い、と語っている。異をとなえるのは勉強が足りないということであろうか。よほどマルクス主義を勉強しないところうした一連のできごとが理解できないか、というのであれば、このような解放理論はどこかに誤りがあるか、そうでなければ知的アリストラートの飾りものになる

佐倉直巳

であろう。八太舟三はうまいことを言っている。「自由連合主義は……如何に無学な人でも、凡そ茶碗と箸とを持つことを知っていれば、忽ち分かるところの原理である。……もし西洋の書類を説破し、バクーニンの文献表を暗誦しなければ、自由連合主義が分らないのなら、自由連合主義は、インテリゲンチヤの玩弄物に過ぎなくなるであろう」と。マルクス主義政党のこうした傾向はすでに一世紀も前にバクーニンによってみごとに予測され、警鐘が乱打されていたのである。

次に、つい先年までは経済成長万能の時代であった。ところが公害、自然資源の枯渇が目前に登場すると、今度は生産力崇拜、物質的繁栄が否定され、自然との調和がもてはやされる。こうして科学崇拜が否定されることとなり、バクーニンの思想が再評価される。

第三に、右のこととも関連するのだが、近年は農業のみなおし、都市から農村への回帰が流行し、大都市中心主義に疑問が呈されている。かくして中央集権主義が拒

否され地方自治、地方分権が復権し、都市と農村の調和ある発展が要望される。ここにもバクーニンの思想が登場する基盤がある。あるいはまた、代表民主制の実態的破壊による直接民主制への志向のなかにもバクーニンを発見できるかもしれない。(但し、アナキズムと民主主義の原理的な違いは、きちんとわきまえておく必要がある。ブルードンを参照のこと)。

もつと多くの事例をあげて、バクーニンの思想が如何に現代的意義をもっているか、を実証することができよう。そしてバクーニン研究が併行するとともに専門化、細分化が進行し、「ちよつと勉強しはじめたような大学院生」にはとても理解できかねるような難解なバクーニン研究論文が次々と公表されるかもしれない。ついに、バクーニンは「国家」と「諸国家」を区別して用いている、という高度に学術的な論文が発表され、バクーニンの訓誥学や注釈学が流行しないともかぎらない。

けれども、このようなバクーニンの読み方はバクーニンにふさわしい読み方と言えるであろうか。私はきわめて懐疑的ならざるを得ない。

バクーニンの著述は、冗舌であり、くり返しが多く、ときとして主題から逸脱するのであるが、これらの弊害をのぞけば、ことに一八六〇年代以降のものは平易であ

るし、特別の予備知識もなくしてたやすく通読できる。その著述に未完が多いのは落ちついて執筆している余裕も意図もなかったからであろう。その著述のほとんどはおそらく目前の蜂起、革命、反抗のためのものであつて遠い過去や将来のことを熟考したものには無にひとしい。バクーニンにとり重要なことは壮大な理論体系を残すことではなくして、彼自身の現存する環境でアナキズムを実践することであり、その著述はその実践のための手段にすぎなかつた、と断言できると思う。だから、バクーニンの著述の訓誥学が行なわれたとき、もつとも困惑するのはバクーニン自身であろう。

大英博物館に閉じこもつたマルクス、反抗の行動に追いまくられたバクーニンを同一の次元で処遇することはできないし、逆にそこに二人の統一や結合の契機がある(成果は別として)と言えないこともないのだが、二人にはそれにふさわしい読み方があるように思う。近代思想が「冬の炉部屋で思索にふけつた」デカルトから出発するとしたなら、マルクスこそデカルトのもつともすぐれた嫡出子であり、バクーニンはその最大の反逆者であろう。バクーニンを読む者は「冬の炉部屋で読書にふける」デカルトを否定することからはじめねばならない。

2

ミケランジェロはいま生きている、疑うものはダビデを見よ——これは羽仁五郎氏のミケランジェロ伝の冒頭である。バクーニンがいま生きていることを疑うものには、何をみるように指示すればよいのであろうか。芸術家は芸術作品に自己を対象化することによって永遠に生きつづけることは可能である。上部構造の相対的独自性などというややこしい理論をふりかざさなくても、社会的背景が異なろうと人間の芸術作品に対する感覚はそれほど変化しないであろう。では、バクーニンは何に自己を対象化したであろうか。その答は六〇数年の生涯である。バクーニンの著述は自己対象化の一部にすぎないのであるから、著述をひとり歩きさせるのは誤りであろうといことを留意しつつ、著述を通じてしかバクーニンに接近できない現在、私はバクーニンや他のアナキストの著述から自由と破壊だけではなく、平等とパンを読み取りたいと思う。

バクーニンは多くの著述を残し、多くの大事件に関与し、耳目をそばだたせているが故に、後世に知られ、比喩的に「いま生きている」ということもできよう。けれどもおびただしい著述や世人の注目を集める行動はけっして自己目的ではなかつたはずである。もしバクーニン

とトルストイとが現に生きていたなら、名誉と金銭を得んがため、虚栄心と利慾と高慢心からものを書く文士連中を攻撃し、対岸の火事に狂喜し、安全地帯から金切り声をあげ、「人民のために」「民衆とともに」「弱者救済」などという偽善のスローガンをもてあそぶ社会主義者に集中砲火をあびせることであろう。そして、アナキズムを大々的に標榜することなく日々実践し、「ジャコバン派から誤解されたルソー」を「誠実なるルソー」(ルージュモン)が克服しようとする努力する過程で、野に咲くレンゲ草のなかで行き倒れ、無名戦士の墓にすら合祀されることのない無縁仏となる——バクーニンはこう望むかもしれない。けれど、商品化と風化におびやかされるアナキズム、「カフエの卓子の間で永遠化する知的アナキズム」などはバクーニンのもつとも唾棄するところであろうからである。

3

バクーニン以降のアナキズムはアナルコ・サンジカリズムと共産主義的アナキズムの二つに大別される。といっても二つの潮流はバクーニンに端を発するというのではなく、バクーニン以前にも同時代にもあつたのである。が、対立が顕在化したのはバクーニン以降のことである。バクーニンの思想は『インタナショナルの政策』によ

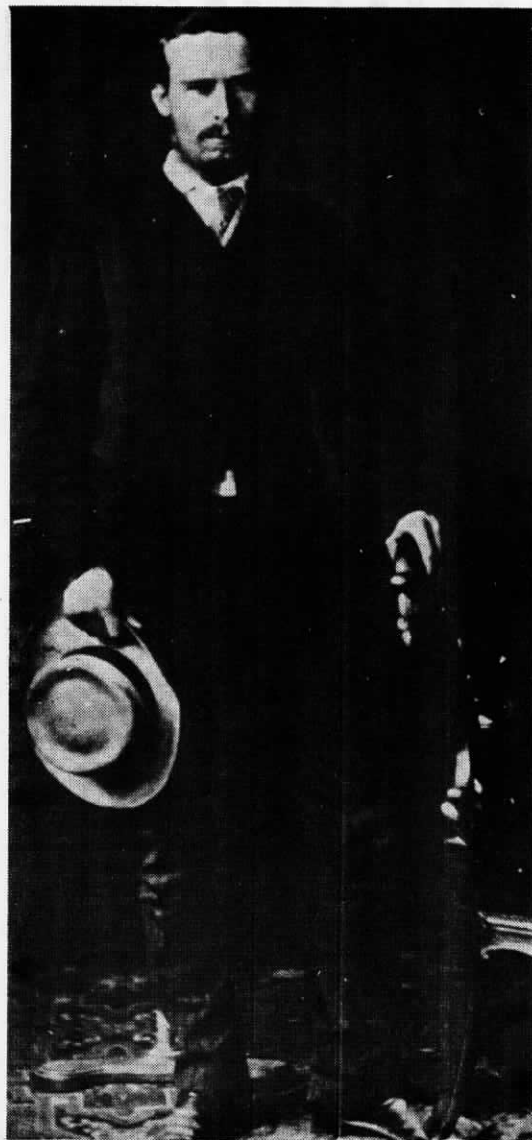
く現われているように、どちらかといえばアナルコ・サンジカリズムの潮流に属する。しかしながら、バクーニンに深い尊敬の念を表明していたのはアナルコ・サンジカリストだけでなく、共産主義的アナキストたち、たとえばルクリュ、マラテスタ、クロボトキン、ラムス、ラシダウアー、ファブリなどもそうであった。このことは、バクーニンの全生涯を貫く思想と行動のなかに、アナルコ・サンジカリズムと共産主義的アナキズムとの共通項、上位概念、ないしは指導形象があることを証明するであろう。それはバクーニンの間断なき、自分の足下での反権力、反国家の原質であり、こうした原理を除外して共産主義的アナキズムもアナルコ・サンジカリズムも語ることはできないはずだ。だから、国家と権力を廃絶するための国家と権力を認めることはできないし、そもそもそういうものは存在しないであろうし、かりに、あるときにそのような意図で確立されたとしても、ロックやモンテスキューの手のヒラを脱け出ることはないであろう。反権力、反国家を口にしなが、権力や国家へ向うのはその主張する反権力や反国家が正しくないからである。ギョイヨーも指適するように、考える通りに行動しない人は、考えが不完全なのだ。

バクーニンの目標としていたアナキズムの社会は、彼

は重点を破壊にいたせいか、それほど明確な構造ではなく、クロボトキンやマルクスの方がはるかにくわしいプログラムを提示してくれるが、窮極的にそんなに相違はないであろう。バクーニンのいう他人が自由であるとき自分も自由であるという社会は、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような一つの結合社会」(マ・エ)であり、クロボトキンのいう分業の終息した社会は、「狩人、漁師、牧者または批判者になるなどということなしに、私の気のおもむくままに、朝には狩りをし、午すぎに魚をとり、夕には家畜を飼い、食後には批判する可能性」(同上)のある社会であろう。こうした社会が、たとえある一定の過渡期以降であろうとも、到来するとは思えない。むしろ、実現すべき理念型として向って行く社会であり、ブルードンのいうように、「アナルシー、支配者、主権者の非存在、これがわれわれの日々に接近していく統治形態である」。おそらくここからあたりにアナキズムとマルクス主義との決定的な架橋できない深淵があらう。アナキズムの目的を達成せんとするアナキズムの組織はその構造と活動においてアナキズム社会の原則に一致しなければならぬ、という、目的と手段の整合性を主張するマラテスタの発想(これが屈折されると「純正」という独断的な形容詞となる)はア

ナキズム固有のものであらう。

書齋にこもって観念的に理論を精緻化し、それを公式的に適用するならともかく、現実に資本と権力に対決するとき、共産主義的アナキズムもアナルコ・サンジカリズムもそれほど差はないであらう。いずれも少しずつアナキズム社会へ向う試行錯誤をくり返す。それでいいのだと思う。なぜなら、私たちは、飢餓同盟が地熱発電所をつくり、一挙に理想社会が出現するとは信じられないからである。



Netchaiev. (U.S.G.)

あとがき

バクーニンの死後一〇〇年記念にあたり、リベルターの編集同人の間で何かしようと話合ったのが今年の初めだったろうか。それから幾度も己が能力の限界を思い知らされて、結局特集号を7月号として出そうと予定したのが四月頃だった。この件で連絡を取り編集以前の原稿割当てだけで数回会合し、あとは各自の責任分担ではとんと干渉せず集まったものを開陳することにした。それがご覧に供しているようなパンフともつかず雑誌ともつかず、要するにその両方を止揚した代物ができたというのである。

さてこれまでのわがアナキズム陣営でのバクーニン理解は、百年一日のように筵旗一揆主義の提唱者かその最も良いものでアナルコ・サンジカリズムの指導者とするのだが、俗耳には総破壊の使徒というのが入りやすいようだ。そこで理論好きの人士はバクーニンに革命者の気質、情熱は認めてもそこに理論があるとは承認しないし、実にマルクスがそうであつたように無理論の騒ぎ屋風情としかみなさない。だが一度でも彼の書き物に直接触れてみれば、その熱烈な真理への愛と探究、形而上学

を破壊して、人類の営みを普遍で必然のものと捉え、その進歩に寄与するのが生であるとしたバクーニンには、アナキズムとは現実における人間性の実在化行動による実存に他ならなかった。戦後の知的風土の中で、バクーニンの思想がカミュの「シジフ」の神話や「反抗の人間」に片影を見せるのはそれが理由である。しかしそれだけではなく、十九世紀後半のヨーロッパ社会では民衆の運動、社会活動として労働者の組織活動が興隆していた。彼はそれこそ人類解放の一大モメントと解し、尽力したのであった。重ねていえばバクーニンは思想の力を信じていたし、その弊害もよく知っていた。本書は期せずしてバクーニンについての細部管見というより、できるだけ概略を捉えようとするものになった。と同時に各自のバクーニンへのシンパシーを表明する意味で「われらのバクーニン」を標題にしたのである。頁数の増幅や関連者の発病などによって、予定より遅れて発刊の運びになり、予約者にご迷惑をおかけして済まないと思う。いづれ本書の出来栄で償いたい、私達としてはこれでバクーニンが終わったのではなく、彼の思想を共有の財産とする試みへの第一歩を踏み出したのだとしたい。誤解や誤謬については大方の叱責をお待ちしよう。

※小川正夫「性とアナキズム」参照（文責・はしもと）